

註 この度の『靈界物語』・「発端」から第二章「顕幽一致」までは、聖師自ら当時の機関誌『神靈界』に執筆掲載されてあったもので、『靈界物語』の刊行に際しそのまま使用される予定だったのを、当時の最高幹部浅野和三郎氏たちにより聖師に膝詰め談判までして書き直しを迫り、聖師と開祖の神格の違いを明確にされることを拒み、聖師は時よ時節を待とうとされて今日まで隠されていたものです。戦後「王仁校訂本」の出版の際も、この浅野氏たちによる改竄本をそのまま踏襲されてきました。今回はじめてその原典に回帰できる運びとなったことは正に時節到来の機会と思います。因みに傍線の箇所は校訂本の表示、()で囲んだゴシックの箇所は『神靈界』の原典の表示です。なお、で囲んだ箇所は校訂本のみ掲載の表示、印は用語説明の表示です。

発端(序)

自分(王仁)が明治三十一年旧二月九日、神使に伴なわれ丹波穴太の靈山高熊山に、一週間の靈的修業(靈的修行)を了えてより天眼通、天耳通、自他神通、自他心通、天言通(天言通)、宿命通の大意(大略)を心得(神得)し、神明(治教皇道大本)の教義をして今日あるに至らしめたるについては、千変万化の波瀾があり、縦横無限の曲折がある。旧役員(の)反抗、信者の離反、その筋の誤解(官権の圧迫)、宗教家の迫害、親族、知友の総攻撃、新聞雑誌、単行本の熱罵嘲笑、(社会的誤解等)実に筆紙口舌のよくすると

一週間の靈的修行……出口王仁三郎が明治三十一年旧曆二月九日から一週間、高熊山にて幽体離脱し靈界で修行された時のこと。

天眼通・天耳通・自他心通・天言通・宿命通……これに漏尽通をいれて六大神通力という。天眼通は一切の事物を自由自在に見抜くこと。天耳通は靈感によつて神の御声、神靈界の声を聞きとれる神通力。自他神通は神の心を感じ、他心を受受し、わが心を他に感通せしめる力。天言通は神靈の感応のままに聖言を言わしめられる通力。宿命通はすべてのものの宿命を感得する通力。漏尽通は心の迷い一切をなくする最高の神通力。

治教皇道大本……治教について、ここでは従来の觀念を超えた大宗教の意味。

ころのものでない。自分(王仁)はただただ開教後廿四年間の経緯を、きわめて簡単に記憶より呼び起(喚起)して、その一端を示すことにする。

竜宮館(皇道大本)には変性男子の神系と、変性女子の神系との二大系統(二大神系)が、歴然として区別されている(居る)。変性男子(出口大教祖)は(国祖)国常立尊の表現神として綾部の地の高天原に現われ、(神政出現)神世出現(の予言)と(警告を)発し、千辛万苦、神示を伝達(以て)神世出現の神業を専行(し、水をもって身魂の洗礼を)施し、救世主の再生、再臨を待つておられた(ので)在る。ヨハネの初めてキリストに對面するまでには、ほとんど七年の間、(野)野(に)叫びつつあったのである。(そして)変性男子の肉宮は女性男靈にして、五十七才はじめてここに(嚴)の御魂の神業に参加したまい、明治二十五年の正月元旦より、同四十五年の正月元旦まで、前後滿二十年間の水洗礼をもって、現世の汚濁せる靈体両系一切(体系一切)に(洗)礼を施し、(世界改造)世界革命(の)神策を(顯)示(した)まうた(のである)。かの(歐洲)大戦(の)ときは、(嚴)の御魂の神業(の)発動(の)一端(にして、三千世界の)一大警告(であつた)と思つ(た)のである。

変性女子の肉宮は瑞の御魂の神業に参加奉仕し、(火)靈(を)もつて(世界)万民(に)洗礼を施すの神務である。明治三十一年(の)旧二月九日(を)もつて(神業)に(参加)し(瑞)靈(の)表現者として現われ、大正七年二月九日(を)もつて(前後)滿二十年間の(靈)的(神業)を(ほとん

皇道大本……(皇)すめらぎ(の)道の真意は天皇ではなく神素盞鳴大神のことで、その根本の教えを説く所の意味があつたのだが、信徒にも自覚がなかつた。

変性男子の神系……出口直の教えのみを信奉する人々。

変性女子の神系……出口王仁三郎の教えを信奉する人々。

出口大教祖……出口直の尊称。

国祖国常立尊……靈界物語では良の金神、または国治立大神。

綾部の地の高天原……靈界物語では竜宮館、また錦の宮ともいう。現界では、京都府綾部市の本宮山。

嚴の御魂……ここでは出口直開祖のこと。

水洗礼……物質界を主として改造される神業のことで、水の洗礼ともいう。

三千世界……神界・幽界・現界の三大境界であり、また過去・現在・未来をもさす。

瑞の御魂……ここでは出口王仁三郎のこと。

靈的神業……神靈の世界に関する神業。

ど 完成した()のである。物質万能主義、無神無靈魂説に、心酔累惑せる体主靈従の現代も、やや覚醒の域に達し、神霊の実在を認識するもの、日に月に多きを加えきたれるは、すなわち神霊(瑞霊)の偉大なる神機発動の結果にして、決して人智人力の致すところではないと思つ()のである。

(誤れる信者の中には、今日の皇道大本の発展と天下の覚醒は、役員信者の忠実熱心なる努力の結果なりと称すれども、如何に神智偉能ありとも、嚴瑞二霊の深甚なる御経綸と、神界の御加護なくしては、一人と雖も首肯せしめ入道せしむる事は出来ないのである。)

変性男子の肉宮は(五十七歳にして)神政開祖(神世開祖)の神業に入り、爾来二十有七年間神筆を揮い(振るい)、もつて靈体両界の大改造(物質界の大革新)を促進し、今や靈界に入りても、その神業を継続奉仕されつつあるのである。

つぎに変性女子は三十年間の神業に奉仕して、もつて五六七神政の成就を待ち、世界を善道にみちびぎ(道義的統一)もつて神明(神皇)の徳沢に浴せしむるの神業である(と聞く)。神業奉仕以来、本年をもつて滿二十三年、残る七ヶ年こそ(女子に取りて)最も重大なる任務遂行の難関である。神論に曰く、

『三十年で身魂の立替立直しを(と)いたすぞよ』

と、変性男子の三十年の神業成就は、大正十一年の正月元旦である。変性女子の三十年の神業成就は、大正十七年二月九日である。神論に、

体主靈従……自己(愛智)ちしき()の身魂・尊体卑心の身魂ともいい、悪霊に心身を占領された者の称。生きながら中有界(天国と地獄の間のこと)に迷っている人間の境遇をいう。

天下の覚醒……一般社会が自覚めること。

嚴瑞二霊の深甚なる御経綸……嚴霊と瑞霊神の非常に深い方策。

神世開祖の神業……大本を開いた出口開祖の御用。

物質界の大革新……現実世界を改め直すこと。

道義的統一……人の行つべき正しい筋道にまとめること。

神皇……主の神(天祖)神素盞鳴大神のこと。

神論……出口直が書かれたお筆先を、出口王仁三郎が漢字を入れて理解しやすくされた書物。

立替立直し……改化遷善への御用。

『身魂の立替立直し』

とあるを、よく考えてみると、主として 水洗礼の靈体両系の改造（体系的革命）が三十年であつて、これはヨハネの奉仕すべき神業であり、体靈洗礼（靈洗礼）の靈魂的改造（靈魂的革令）が前後三十年を要するという神示である。しかしながら三十年と神示されたのは、大要を示されたもので、決して確定的のものではない。伸縮遅速は、とうてい免れないと思ふ。要するに、（是は）神界の御方針は一定不変であつても、天地經綸の司宰たるべき奉仕者の身魂の研不研の結果 によつて變更されるのは止むをえないのである。神諭に、

『天地の元の先祖の神の心が眞実に徹底了解たものが少し（三人）ありたら、樹替樹直しは立派にできあがるなれど、神界の誠が解りた人民が無いから、神はいつまでも世に出ることができぬから、早く改心いたして下されよ。一人が判りたら皆の者が（後の信者は）判つてくるなれど、肝心のもの（御方）に判らぬというのも、これには何か一つの原因が無ければならぬぞよ。自然に氣のつくまで待つておれば、神業はだんだん（と）遅れるばかりなり、心から発根（と）の改心でなければ、教えてもらつてから合点する（様な）身魂では、到底この御用（大神業）は務（勤）まらぬぞよ。云々』

實際の御經綸が分つてこなくては、空前絶後の大神業（大革正の神業）に完全に奉仕（奉行）することはできるものではない。（実に神様は齒痒く思つて居らるゝでありま

体系的革命……現実社会における変革。

靈洗礼……靈界を主として改造される神業のこと。

靈魂的革命……精神的（靈界）における変革。

天地經綸の司宰……現実世界に活動する人間の使命を称えていつ。

天地の元の先祖の神……主の大神のこと。
またの御名は 大國常立神言・天之肇火夫の神・天津御祖神。宇宙の大根元を創造された主の親神のこと。

神界の誠……主の神さまの眞実。

しよう。(御神論に身魂の樹替樹直しということがある。(大抵の信者は、此の身魂を混同して(ミタマといえ、靈魂のみのことと思つてい)居)る人が沢山にあるらしい。身は身体、または物質界を指し、魂とは靈魂、心性(心性)、神界等を指したまうたのである。すべて宇宙は靈が本で(靈は尊く)、体が末(次ぎ)となつてい(居)る。身の方面、(即ち)物質的現界の改造(改革)を断行されるのは国祖大国常立神であり、精神界、神靈界の改造(改革)を断行したまうのは、豊国主神(の顕現たる瑞の御魂)の神権である。ゆえに宇宙一切は靈界が(は)主であり、現界が従であるから、これを称して靈主体従といつのである。(大本の信者の大部分は真正に神論の了解が出来て居ないから、体的経綸の神業者ヨハネを主とし、靈的経綸の神業者を従として居る人が多い。否な全部体主靈従の信仰に墮落して居るのである。神論に

「良の金神が天の御先祖様 五六七の大神様の御命令を受けて、三千世界の身魂の立替、立直しを致すぞよ。それに就ては、天の神様に降りて御手伝遊はずぞよ」

とあり、《天の神様に降りて御手伝遊はずぞよ》との神示に注意すべきである。此間の神界の御経綸が分らなければ、皇道大本の真相が解らぬ。真相が解らぬから何時までも体主靈従の誤つた宣伝を続行して、益々天地の大神の御経綸を妨ぐる事になるのである。神論に

も

「途中の鼻高が我はエライと慢心いたして、神を尻敷にいたして居るぞよ」

国祖大国常立神……地上靈界の主宰神。
 大地球の造り主にまず地の先祖への尊称。
 豊国主の神……国祖の輔佐神豊雲野尊として現れ、精神界・神靈界の改造には瑞の御靈として御活動される。またの御名は神素靈鳴大神。
 顕現……現実世界に現われること。目に見えること。
 良の金神……国祖大国常立尊。
 大本……出口開祖と出口聖師が実在されていた当時の大本教団。
 体的経綸……現界の方策。
 靈的経綸……靈(神)界の方策。
 五六七の大神様……理想世界が完成された時の天祖。

とあるが、是が判つた人が、一日も早く出て来て欲しい。身と魂と一致して神業を完成するのは、三代の御用と云う事も、以上の消息が解つて来ない間は、実現するもので無いのである。神諭にも

「斯の大本は男子と女子との筆先と、言葉とで開く経緯であるから、外の教を持って来て開いたら大変な間違いが出来て来て、神の経緯の邪魔になるから、役員のおんかたころえ下されよ。慢神致して我を出したら、神の真似を致して筆先を人民が出したら、何處でも後戻りを致すぞよ。今は初発であるから、成る様に致して、御用聞いて貰わねばならぬなれど。五六七様がお出ましになりたら、男子女子の外は筆先は出されんぞよ」

云々と所々に示されてある。此の筆先と云う神意は新聞紙の事では無い。要するに役員さん等の発行されつゝある単行本の中でも、教義の意味を含んだものを指されたのである。何程人間の智慧や学文の力でも、深玄微妙なる神様の大御心が判るもので無い。故に大本の歴史に関する著述は差支えないが、苟くも教義に関する著書は、神諭の解つた役員信者から根本的に改変して貰わぬと、何時迄も神様は公然と現われ玉う事が出来ぬので在ります。

今迄の著書と雖も、全部誤つて居るのでは無い。唯教義の意味ある箇所に限つて人意が混合して居るだけである。然し乍ら、仮令一小部分でも間違つて居つては実に変である。王仁は学者の意見を尊重して、今日迄は隠忍して和光同塵策を持して来たのであるが、最早今日と成つては信者も多く、又神霊界の読者も日に月に増加し、天下の注意を曳く如う

三代……大本教の三代教主・出口直日のこと。

筆先………出口直に神が懸り書いた書物。

神霊界………大正六年一月から同十年六月まで発行されていた当時の大本教団の機関誌の名。

に成つて来たから、黙視するに忍びず、涙を呑んで此の稿を書いたので在る。何程立派な神が憑つて、書を著わしたり、口で説いても根本の経綸は解つた神はない。皆近頃現われる神の託宣や預言は全部守護神が大本の神諭を探り、似たり八合の事を行つて居るもの斗りである。今後未だまだ所々に偽預言者、偽救主が出現して、世人を惑わせ、世人をして其の本末軽重を誤らしむる事が出て来るから、読者の深甚なる注意を望む次第であります。）

靈主体従の身魂を靈の本の身魂といい、体主靈従の身魂を自己愛智の身魂という。靈主体従の身魂は、一切天地の律法に適いたる行動を好んで遂行せむとし、常に天下公共のために心身をささげ、犠牲的行動をもつて本懐となし、至真、至善、至美、至直の大精神を發揮する、救世の神業に奉仕する神や人の身魂である。体主靈従の身魂は私利私慾にふけり、天地の神明を畏れず、体慾を重んじ、衣食住にのみ心を煩わし、利によりて集まり、利によつて散じ、その行動は常に正鵠を欠き、利己主義を強調するのほか、一片の義務を弁えず、慈悲を知らず、心はあたかも豺狼のごとき不善の神や、人をいうのである。

天の大神は、最初に天足彦、胞場姫のふたりを造りて、人体の祖となしたまい、靈主体従の神木に体主靈従の果実を実らせ、

『この果実を喰うべからず』

と厳命し、その性質のいかんを試みたまうた。ふたりは体慾にかられて、ついにその厳命を犯し、神の怒りにふれた。

守護神……その人の本体である精霊。

これより世界は体主靈従の妖気発生し、神人界に邪悪分子の萌芽を見るにいたつたのである。かくいう時は、人あるいは言わむ。

『神は全智全能にして智徳円満なり。なんぞ体主靈従の萌芽を刈りとり、さらに靈主体従の人体の祖を改造せざりしや。体主靈従の祖を何ゆえに放任し、もって邪悪の世界をつくり、みずからその処置に困むや。ここにいたりて吾人は神の存在と、神力とを疑わざるを得じ』

とは、実に巧妙にしてもつとも至極な議論である。

されど神明には、毫末の依怙なく、逆行的神業なし。一度手を降したる神業は昨日の今日たり難きがごとく、弓をはなれたる矢の中途に還りきたらざるごとく、ふたたび之を更改するは、天地自然の経緯に背反す。ゆえに神代一代は、これを革正すること能わざるところに儼然たる神の權威をとまなつのである。また一度出でたる神勅も、これを更改すべからず。神にしてしばしばその神勅を更改し給つごときことありとせば、宇宙の秩序はここに全く紊乱し、ついには自由放漫の端を開くをもつてである。古の諺にも『武士の言葉に二言なし』という。いわんや、宇宙の大主宰たる、神明においてをやである。神諭にも、『時節には神も叶わぬぞよ。時節を待てば煎豆にも花の咲く時節が参りて、世に落ちておきた神も、世に出て働く時節が参りたぞよ。時節ほど恐いものの結構なものは無いぞよ、

云々』

と示されたるがごとく、天地の神明も『時』の力のみは、いかんとも為したまうことはできないのである。

天地剖判の始めより、五十六億七千万年の星霜を経て、いよいよ弥勒出現の暁となり、弥勒の神下生して三界の大革新を成就し、松の世を顕現するため、ここに神柱をたて、苦・集・滅・道を説き、道・法・礼・節を開示し、善を勧め、悪を懲し、至仁至愛の教を布き、至治泰平の天則を啓示し、天意のままの善政を天地に拡充したまう時期に近づいてきたのである。

吾人はかかる千万億才にわたりて、ためしもなき聖世の過渡時代に生れ出で、神業に奉仕することを得ば、何の幸か之に如かむやである。神示にいつ。

『神は万物普遍の聖靈にして、人は天地経綸の司宰なり』

と。ア、吾人はこの時を置いて何れの代にか、天地の神業に奉仕することを得む。

ア、言靈の幸はつ国、言靈の天照る国、言靈の生ける国、言靈の助ける国、神の造りし国、神徳の充てる国に生を稟けたる神國の人においてをや。神の恩の高く、深きに感謝し、もって国祖の大御心に報い奉らねばならぬ次第である。

至治泰平の天則……天下の至つてよく治まることが神の定めた規則。

言靈……言葉の靈(たましい)心の主要のついで。

本 居 宣 長

知るといふはたれのしれもの天地の

あやしきみわざ神ならずして

神といへば皆ひとしくや思ふらむ

鳥なるもあり虫なるもあり

あやしきをあらじといふは世の中の

あやしきしらぬ痴心しんかも

この本居宣長の歌は実際に『霊界物語』第七版に、「発端」の後に印刷されており、その通り挿入致しました。